

どこかで一番鶏がないた。

表の農道を荷車の音が通り過ぎて行った。

朝の早い農夫が、もう野良に出かけて行くのだから。

荷車のきしみが次第に遠ざかると、明け方のき

びしい冷えが夫婦を押し包みはじめた。

おおてと呼ぶ高い石垣をめぐらした女木島の

家々は、強い風の中でまるで寄りそうようにひっ

そりと集まっていた。

喜乃が身を寄せているという漁師、田辺正吉

の家は、浜から細い坂道を少しのぼったところに

あった。

おおての中へはいると急に風がとだえた。

からつぼの魚籠がいくつものころがり、乾いた魚

臭がふんと鼻をついた。

露はシヨールをはずして、おおての内側にたた

ずんだ。

どうしても喜乃に会わなければならぬ。すべ

てはそれからだ、とひたすら思いこんでここまで

やってきた。

しかし、喜乃に会って何を話すのか。そのあと

はどうするのか。そこまでは全く考えていなか

った。

(現実を自分の眼で確かめねば…)

そんな思いだけが、露を駆り立ててきたといえ

た。

今、目の前にある家の中に、夫の子を宿した

女がいる……。

一瞬、露の中にためらいが走った。

(引き返そうか)

会ったところでどうなるというのだ。信次の

言葉は真実を語っているに違いない。現実はもう

動かしようのないところまで進んでいる。それを

自分はどうしようとしているのだろう。

(いや、やっぱり……。会ってみよう。会うべき

や)

自分は信次の妻なのだ。

露は背すじをしゃんと伸ばし、大きく息を吸い

おおての中へはいると急に風がとだえた。

からつぼの魚籠がいくつものころがり、乾いた魚

臭がふんと鼻をついた。

露はシヨールをはずして、おおての内側にたた

ずんだ。

どうしても喜乃に会わなければならぬ。すべ

てはそれからだ、とひたすら思いこんでここまで

やってきた。

しかし、喜乃に会って何を話すのか。そのあと

はどうするのか。そこまでは全く考えていなか

った。

(現実を自分の眼で確かめねば…)

そんな思いだけが、露を駆り立ててきたといえ

こんだ。潮の匂いが肺の中に満ちて、少し気持ち

がおちついた。挑戦的な気分が身体の奥の方か

ら湧き上がってきた。

露は確かな足どりで、家の入口に近づき、戸を

開けた。

今日、露が訪れることについては、信次から

正吉に手紙が届いているはずで、当然、喜乃も知

っているに違いなかった。

喜乃の借りている一室は、うす暗い部屋をいく

つも横切った奥の突き当たりであった。

「喜乃さん、奥さんがおいででたで…」

正吉が襖の外から声をかけた。

「どうぞ…」

細い声が聞こえた。

露は、きつと唇を結んだ。

開けられた障子の中の炬燵の前に、一人の女が坐っていた。

左半身にはほのかな障子あかりを受けていたが、身体の殆どは部屋のほの暗さの中に沈んでいた。

露は、すすめられた座布団を当て、喜乃と向かい合った。

目がなれると、部屋のうす暗さも気にならなくなった。

「申しわけありません：。」

露が口を開こうとするより早く、喜乃が、畳に

両手をついた。

「こんなことになってしもうて：。」

露は黙っていた。何と云えばいいのか、言葉が見つからなかった。

「奥さんに、今日は何もかも聞いていただきたいと思つて……。わたし、お待ちしりました……。」

喜乃が顔を上げた。手をついたまま、露の眼を静かに見上げた。

露は思わず息を呑んだ。

うす墨色にくすんだ部屋あかりの中に浮かんだ喜乃の顔は、夕闇に暮れ残った白牡丹にも似た幽艶さを漂わせていた。

しつとりと艶を帯びた乳色の肌は触れれば溶

けそうにはかなげであり、黒眼がちの瞳も憂い

の色をたたえていたが、一か所だけ朱を点じた小さな唇があざやかで、それが何とも艶であった。

無造作に束ねた髪から二、三本、おくれ毛が散りかかっているのが障子あかりに見えた。

銘仙の花模様の袷の上に、淡い紫 矢絣の

羽織を重ねた衿元が、心もちゆるやかなのは、身重の身体のせいなのだろう。

ゆつたりとした胸もとから、母親になろうとしている女の肌が匂い立つようであった。

(何という、きれいな……)

露はたじろいだ。女どうしとして、相手の美しさにこれほど魅せられたのははじめてであった。

「わたし、始めは旦那さんを恨んでおりました。

父がいつか伺った時の様子を聞いておりましたから……。

でも……。お会いしてみて、おつき合ひしていくうちに、いつのまにか、そんな気持ちが消えていくのに気がつきました……。」

喜乃は、両手をあげて坐り直すと、語り始めた。

信次は、喜乃と会つて一か月後にリーベをやめさせ、高松市内で別に部屋を借りて喜乃を住まわせるようにした。

その話が出た時、喜乃はまっ先に父、修造に話した。修造は真向から反対した。奥さんに顔

む 向けができなくなる、とかきくどく 修造に、膝を
折って頼みこんだのは信次であった。

「悪いのはわしじゃ。わしがすべて悪者になる。
頼む。喜乃をわしにくれ…。」

信次は修造と喜乃の前に、深々と頭を下げた。
だが、何よりも二人を驚かせたのは、信次の次の
言葉であった。

「喜乃にはわしの子を生んで欲しい。生まれた子
は長山の家を継がせる。約束する…。」

嘘を言っている顔ではなかった。

修造は、ますます身を縮めた。実直な修造
の全身を、罪の意識が押し包んだ。

喜乃は運命が大きく変りつつあるのを感じて

ぶんべい 文平のために…とは言わない。自分のためにこの
うんめい 運命に身をまかせよう。貧乏から抜け出せるなら
ば……。

喜乃は、おろおろする修造を説き伏せて、信次
の借りてくれた家に移り住んだのであった。

信次は、週に二回は必ずやってきた。だが、
決して泊って行くことはしなかった。

役所の帰りに立ち寄り、十時には必ず飯内村
へ帰る習慣を、信次はかたくなに守った。

しかし、暮らし向きのことば言うに及ばず、着
るものから、ものの言いよう、化粧、髪かたちに
至るまで、喜乃を思い通りの女に仕立て上げよ
うとする信次でもあった。

いた。

十五も年上の男の囲われ者となる。そして、
その男の子供を生む。このような人生をかつて
予想したことがあつただろうか。

(今ならまだことわることができる。まだ、自分
の意志を通すことができる…)

しかし、喜乃は、とうとうそれをしなかった。

喜乃は、貧乏から逃れたかったのだ。

貧乏ゆえに、いわれのない恥辱も受ける。

可能性に満ちた才能さえも、押しこめてしまわね
ばならない。

喜乃は、弟、文平のことを思った。

貧乏のつらさは、骨の髄までしみこんでいた。

いくなれば、それが信次流の、女の愛しみ方
なのであった。

人形のように扱われながら、喜乃は少しも逆
らわなかった。むしろ、そうされることが幸せと
さえ思えた。頼れる人に何もかもゆだね、その腕
の中でゆらゆらと暮らしていくということは、何
とのびやかなものだろうか。

初夏のかぐわしい夜気が夢の中にまで匂うよ
うなひととき、信次の腕に抱かれて情感の波に
たゆたっていると、喜乃は女に生まれたよろこび
に心がとろけるようであった。

しかし、妊娠を知ったとき、喜乃は愕然とした。
それまで殆ど思いやることのなかった信次の妻、

露の存在が、喜乃の中に大きな場所を占めはじめた。

露には、少女の頃、一、二度会った覚えがある。親しみやすいその風貌が喜乃の印象に残っていた。

露をうらぎっていることへの罪の意識が、はじめて喜乃の身内を襲った。

「だが、わが子が生まれることを知った信次の喜びようは尋常ではなかった。

つわりに苦しんだ時期には、喜乃の好物を持参しては、毎日のように顔を見せ、

「わしの子を生んでくれる喜乃は宝じゃ。わしの子宝じゃ。」

とくり返しながら、しきりに喜乃を抱きしめた。そして、

「お前に会えてよかった。わしは果報者じゃ。お前がおらんんだら、わしは生きてはいけん。わしから離れずにいてくれ…。」

とかきくどくのであった。

喜乃の心は乱れた。

長山家へ引きとることに決まっている子を身ごもったということは、露に対して、倫理的なうら

ぎりの上に、もう一つ、逃れようのないきびしい現実を押しつけることになる。

そして、それよりも何よりも、母と子がいつしよに暮らせない運命が、喜乃には、悲しかった。

わが腹を痛めて生み落すわが子を、手もとに置けない悲痛さが、喜乃の胸を引き裂いた。

(以上3月17日放送分)